

御裳濯河歌合・宮河歌合考--初出歌を中心にして

著者	橋本 美香
雑誌名	清心語文
号	4
ページ	31-41
発行年	2002-08
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000325/

御裳濯河歌合・宮河歌合考

——初出歌を中心にして——

橋 本 美 香

はじめに

「御裳濯河歌合」「宮河歌合」は、西行によってそれまでの詠作の中から選ばれ、三十六番に番えられた自歌合である。この二つの歌合は、正編続編の關係にあり、配列が綿密に計算されたものであり、結番の方法が、対立的・対照的・連鎖的であることが先学によって論及されている^{〔注1〕}。また、この自歌合は秀歌撰の性格を持つこと^{〔注2〕}、伊勢神宮の内宮、下宮にそれぞれに法楽の目的で奉納された歌合であることも先学によって論及されている^{〔注3〕}。

この二つの歌合には、西行の他のどの私家集にも見られない初出と考えられる歌が、それぞれみられる。以後初出歌として述べていくことにする。これらの歌は、歌合の編まれた当時の作品であると考えられている。そして、晩年の歌風をみる上でも重要であるとされている^{〔注4〕}。特に萩谷朴氏は、『西行法師家集（異本山家集）』との關係について、この歌集から綿密に撰歌されたものであり、初出歌の多くは「こ

の歌合のために追加、新作されたものである妥当性が大きい」と考察されている^{〔注5〕}。このような初出歌について、配列の上での効果、また、それぞれの歌の特徴を具体的に考えることによって、西行晩年の歌風的一端を探ることを、本稿の目的とする。

一

「御裳濯河歌合」「宮河歌合」の初出歌の入集状況、西行の私家集、勅撰集、当時の私撰集の入集状況を参考として末尾に示すことにする。これによって『西行法師歌集』との關係の強さに加えて、初出歌のほとんどが勅撰集や、私撰集に採られていないことが窺える。

これに対して、初出歌以外は、多く勅撰集や当時の私撰集に採られている。「御裳濯河歌合」では、既出歌五十七首のうち五十一首、「宮河歌合」では、六十二首のうち五十首が勅撰集や、私撰集に採られている。これに対して初出歌は、「御裳濯河歌合」「宮河歌合」とともに一首ずつしかみられない。「贈定家卿文」に「仁和寺、賀茂辺にあつまり

候哥よみども来り籠りて、わづかにぞやおほゆるをば、かたぶき／＼し候なる」^(註七)とあるように、西行が番えた歌合であるが、編纂の時点から、他の人が見ていることが窺える記述がみられる。また、この歌合のスタイルが、新古今時代以降流行となったことを考えると、この自歌合の編纂当時に作られたと考えられる初出歌も、当時の歌人の目に触れていると考えられるにもかかわらず、ほとんど勅撰集や私撰集に採られていない理由はどこにあるのだろうか。

二

初出歌について配列の上から考えていく。先に述べたように、西行の自歌合は綿密に計算された配列となつてゐる。その中で語のレベル、意味のレベルと様々な階層で表れることが先学の研究によつて論及されている。そして、連鎖的な配列の中で初出歌は、前後の歌の結びつきをより強くする役割を荷つてゐるのではないだろうか。このような立場に立つて、初出歌を含む前後の歌を考慮しながらみていくことにする。

まず、「御裳濯河歌合」十二番の歌をみる。左が初出歌である。初出歌については、以下太字で示すことにする。また、新編国歌大観の番号をアラビア数字で示すことにする。

色つつむ野べのかすみの下もえて心をそむるうぐひすのこゑ

(十二番・左・24)

とめこかし梅さかりなる我が宿にうときも人はをりにこそよれ

(十二番・右・25)

山家客人として詠まれた左の歌では、霞と鶯の取り合わせで、鶯に心を染めたことを詠んでいる。左の歌を受け、右は野徑亭主の詠んだ歌となつてゐる。宿の主が、左の山家客人に対して鶯に心を染めたのであれば、鶯の好む梅の枝を手折りに立ち寄るように、という贈答形式になつており、鶯に縁のある梅を初出歌では詠んでいる。配列の上では、やはり『西行法師家集』の比較的近い番号によつて前後の歌が構成されている。

一方、「宮河歌合」において四番が鶯を歌語に持つ。ここでは、右歌が初出歌である。

ふる巢うとく谷の鶯なりはてばわれやかはりてなかとすらん

(四番・左・8)

色にしみかもなつかしき梅がえにをりしもあれや鶯のなく

(四番・右・9)

ここでも、右の初出歌の前後は、『西行法師家集』の春部の歌となつてゐる。左歌は、鶯が去つた後は自分が鶯にかかつて鳴こうとするだろうと詠うのに対し、懐かしい梅の枝に折しも鶯が鳴いたと詠んでいる。この「をりしもあれや」は、左の歌を受けると、自分が鶯にかかつて鳴こうとしたその「をり」に、鶯が鳴いたとすることが出来る。山田氏によつて「御裳濯河歌合」と「宮河歌合」の歌は対応した形になつてゐるとされているが^(註七)、春の歌について鶯と梅が詠まれ、ともに

贈答歌のように番わされている。

このような形式は山本幸一氏によって、唱和形式とされ「宮河歌合」の特徴として位置づけられているが^(注)、先に挙げた「御裳濯河歌合」十二番の歌から、「御裳濯河歌合」のなかでもみられる形式といえるであろう。このように、初出歌の配された番の中に、唱和形式がみられるのである。

このほかにも、唱和形式となっている番に初出歌が含まれているものが「御裳濯河歌合」にみられる。二十二番、二十三番である。ともに右歌が初出歌となっている。

霜さゆる庭のこのはをふみ分けて月は見るやとふ人もがな

(二十二番・左・43)

山川にひとりはなれてすむ鶯の心しらるる波のうへかな

(二十二番・右・44)

左の歌では、月を見ているかと訪ねてくれる人があつて欲しいと望むのに対し、右の歌では一人で住む鶯の心を知ることが出来るとし、「ひとり」はなれてすむ鶯に左の「霜さゆる庭」の主を重ねている。

大原はひらのたかねのちかければ雪ふる程を思ひこそやれ

(二十三番・左・45)

枯野うづむ雪に心をしかすればあだちの原に雉なくなり

(二十三番・右・46)

左の歌は、「西行法師家集」七二四番「山家集」二五五番にもみられ、大原に住む寂然に贈った歌であることが詞書に記されている^(注)。比

良山系に近い大原を思い遣った歌である。このように「雪ふる程を」思い遣るのは、二十二番右の初出歌にある「ひとり」はなれてすむ鶯に見立てた人の「心」を思い遣っていることを受けていると考えられる。

左で大原の「雪ふる程を」思い遣っているのに対し、右の初出歌では「枯野うづむ雪」を思っている。そうすると現実を引き戻すように「雉」が鳴くのである。この初出歌はここにおいて、既出歌に唱和する形で詠われている。特に二十三番右の歌は、次の二十四番からは恋題になることから、左と右の歌が互いに唱和していく形式が、「雉」が鳴いたことよって終わり、恋題の歌に移行していくことを、示すという役割を荷っているようである。

これらの歌から、「宮河歌合」の特徴であるとされる唱和形式は、「御裳濯河歌合」にもみられる特徴であると考ええる。一方で、二十二番、二十三番の歌は「庵」↓「山川」↓「大原(山)」↓「あだちの原」と都や世の中と隔絶された場所を並べており、語のレベルでも縁のあるものを繋げて、緊密な関係にあるとも考えられる。以上のことから、初出歌の特徴として唱和形式を挙げることが出来るのではないだろうか。

三

一首の歌が、題を替え、四季歌として表れたり、恋歌として表れた

りすることがある。ところが、この歌合においては一首の歌の意が、前後関係によって変化し、二重の意味を持つと考えられる初出歌がみられる。

まず、十七番左歌、初出歌である右歌をあげる。

あはれいかに草葉の露のこぼらん秋風たちぬみや木ののほら

(十七番・左・33)

七夕のけさのわかれの涙をばしほりやかぬるあまのはころも

(十七番・右・34)

十七番左は、「みや木のの原」の「草葉の露」を取り上げ情景を歌い、それに対して右の初出歌では、七夕の情趣を取り上げ、心情を歌っている。「露」↓「涙」、「秋風」↓「わかれ」など左右の歌は歌語の上でも緊密な関係にある。

表を参照して『西行法師家集』との関係をみると、「御裳濯河歌合」十七番左から十九番左までにおいて『西行法師家集』百七十番から百七十四番の歌を番えている。それぞれ題詠であり十七番左「秋風」(『西行法師家集』一七〇)、十八番左「露」(同一七四)、十八番右「鳴」(同一七二)十九番左「ひぐらし」(同一七三)である。そのなかに初出歌が一首だけ組み込まれた形になっている。『西行法師家集』において「秋風」の題詠の前には「七夕」が配されており、次の二首が詠まれている。

舟よする天の川瀬の夕暮は涼しき風やふきわたすらん

(西行法師家集・秋・一六八)

七夕のながき思ひもくるしきにこの瀬をかぎれ天の川なみ

(同・一六九)

「御裳濯河歌合」において十七番から十九番の題は、配列の順序は違わが『西行法師家集』と同じであるといえる。しかし、「七夕」の歌だけが初出歌となっているのである。先に挙げた『西行法師家集』の歌では、「天の川瀬」が中心となっており、仮にこれらの歌を「御裳濯河歌合」十七番右に配したとしても、初出歌を右に配したような緊密な関係は生じない。

次に、十七番の初出歌「七夕の…」の次に配された十八番をみる。

おほかたの露にはなになるならんたもとにおくは涙なりけり

(十八番・左・35)

こころなき身にも哀はしられけり鳴たつ沢の秋の夕ぐれ

(十八番・右・36)

十七番を念頭において、十八番をみると、十八番左の「おほかたの露」は、十七番左の草葉の上に置く露、「たもとにおく涙」は、十七番右の天の羽衣に置くわかれの涙を想起させる。しかし、右の歌との関係でみると、左の袂におく涙は「鳴たつ沢の秋の夕ぐれ」に「あはれ」を感じ取った時におく涙であると受け取ることが可能である。

そして、十八番左の歌の「涙」に、別れの涙と、秋の情景に対する感動の二重の意味を持たせることになっていると考えられる。

また、「御裳濯河歌合」の次の初出歌にも重層性がみられると考えられる。

世をうしと思ひけるにぞ成りぬべきよしのおくへ深く入りなば

(二十六番・左・51)

かかる身におほし立てけむたらちねのおやさへつらき恋をするかな

(二十六番・右・52)

左の初出歌は、吉野の奥へ深く入れば、世の中を憂えたためであるとなつてしまふであろうと詠む。これは、西行が吉野の地に庵を結んだことを指しているように受け止められる。しかし、井上宗雄氏が『深く入る』のは、『世をうし』ではなく、恋の悩みからの逃避だという余韻がある』としているように^{〔注10〕}、右の歌との対応関係では、『世をうし』と思うようになるのは、『親さへつらき恋をする』ためであるとも考えられる。西行の自歌合には、初出歌だけでなく例えば「御裳濯河歌合」三十五番左のように既出歌においても、二通りの解釈が考えられる歌がみられる。このように解釈が分かれるのは、西行が二重の意味を一首に持たせようとしたためと類推することも可能ではないだろうか。

親さえも嘆く恋をすることによつて、どこかへ逃避しようとするのは、

いかならむ蔽の中にすまばかは世のうき事のきこえこざらむ

(古今集・雑下・九五二 よみ人しらず)

を和泉式部が各歌の初字において詠んだ連作を想起する^{〔注11〕}。山本幸一氏は、西行の自歌合に見られる特徴の一つに連歌的であることを示している^{〔注12〕}。二十六番の左と右の結番については、このように左と

右の対応関係と共通する和泉式部の歌がみられ、連歌の付け合いのように、その先行歌をもとに、結番をしたとも受け取れるのではないだろうか。

唱和形式をとったり、歌を二重の意味で解釈できるのは、西行が、『西行上人談抄』において「興ある」ことをよしとした連歌についての記述^{〔注13〕}にも対応するのではないだろうか。また、稲田利徳氏によつて、西行が連歌の名手であつたことが明らかにされている^{〔注14〕}。先に挙げた二十六番の初出歌で「世を憂し」とするのは、この世の無常を感じてと読み取れるが、右の歌との関係で恋のためとりなして意味を取ることが出来るというように、二通りの意味を歌の中に見出すことができることも、連歌をよくした西行の特徴といえるのではないだろうか。

四

次にそれぞれの歌の特徴を取り上げていく。晩年の歌であるとされている初出歌は、古今集時代の歌を先行歌とみなすことができると考えられる歌、同時代歌人の歌の影響関係がみられると考えられる歌がみられる。

先に見た十七番右「七夕のけさのわかれの涙をはしりやかかぬるあまのはごろも」について先行すると思われる歌を次に挙げる。

七日

あけゆけばつゆやおくらむたなばたのあまのはごろもおししほる
まで (躬恒集・三二二)

七月七日庚申にあたりて侍りけるによめる

いとどしくつゆけかるらんたなばたのねぬよにあへるあまのはごろも
(後拾遺集・二三九・秋上 大江佐経)

堀河院の御時、百首歌たてまつる時、よめる

たなばたのあまのはごろもかさねてもあかぬ契やなほむすぶらん
(千載集・秋上・二三七 二条太皇太后宮院後)
けふさへやそではぬらん七夕の暮まつ程のあまの羽衣
(続詞花集・秋上・一五七 よみ人しらず)

「御裳濯河歌合」の十七番右の初出歌は古今集時代の歌人である躬恒の歌が先行歌として考えられる。そして、『後拾遺集』をはじめとして、この歌を先行とする歌が、散見出来るのである。

このように『古今集』を先行歌とする西行の自歌合の初出歌は、他にもみられるのである。

世をうしと思ひけるにぞ成りぬべきよしののおくへ深く入りなば
(御裳濯河歌合・二十六番・左)
みよしののやまのあなたにやどもかな世のうき時のかくれがにせむ
(古今集・雑下・九五〇 よみ人しらず)

二十六番の歌は、左と右が『古今集』の「いかならむ蔽の中にすまはかは世のうき事のきこえこざらむ」を踏まえた和泉式部の連作を想起する歌であることは先に述べたが、この初出歌自体も右に示した『古

今集』を先行歌として挙げる事が出来る。^{注15)}

かりくれし天の川原と聞くからにむかしの波の袖にかかれる

(御裳濯河歌合・二十九番・左)

秋風の吹きにし日より久方のあまのかはらにたたぬ日はなし

(古今集・秋上・一七三 よみ人しらず)

七月六日たなばたの心をよみける

いつしかとまたく心をはぎにあげてあまのかはらをけふやわたらむ
(古今集・誹諧歌・一〇一四 原かねすけ朝臣)

『古今集』を先行歌とする歌がみられるのは、西行が晩年『西行上人談抄』において、『古今集』雑部をもととせよと語ったこと^{注16)}と対応するものであると考えられる。

また、西行と交流のあった歌人にも多くみられる伝統的な歌語も見受けられる。

花さきし鶴の林のそのかみをよしのの山の雲にみるかな

(御裳濯河歌合・三十二番・左)

この歌の「鶴の林」は、釈迦が入滅したとき、沙羅双樹の木が白くなったことを譬えた語であり、仏の涅槃、死を意味する語である。

入道前太政大臣のさうそうのあしたに人人まかりかへるにゆきのふりてはべりければよみはべりける

たきぎつきゆきふりしけるとりべのはつるのはやしの心地こそすれ
(後拾遺和歌抄・哀傷・五四四 法橋忠命)

桜をうゑて侍りけるとし、父のみまかりたりけるに、つぎの

としその木のかれて侍りければよめる

別れにし歎に花のさかぬかな鶴の林もかかりしぞかし

(月詣和歌集・哀傷・九六九 賀茂重保)

常在靈鷲山のころをよめる

ときはなるつるの林をはかなくもたきつきぬとおもひけるかな

(同・釈教・一〇五七 寂然法師)

この他にも新古今時代になると多くの歌人が詠んでいる。

次の初出歌にも、西行と同時代の歌人に同じ発想の歌が見られる。

もらさでや心のうちをくまれまし袖にせかるる涙なりせば

(御裳濯河歌合・二十四番・右)

もらさばやしのびはつべき涙かは袖のしがらみかくとばかりも

(千載集・恋一・六八〇源有房)

しのべども猶せきかねてもらすかなそにあまりはなみだのみかは

は

(公衡集・五十九)

このように初出歌をみていくと、歌の伝統の上に添っている歌であり、同時代歌人にも多く詠まれている表現なのである。西行の初出歌について、西行の表現が西行一人によって生れたのではなく、西行と交流のあった歌人達の間で取り交わされたものが含まれているのではないだろうか。それは、『贈定家卿文』の中で「仁和寺、賀茂辺にあつまり候歌よみども来り籠りて、わづかにぞやおぼゆるをば、かたぶきくし候なる」^(註17)とあり、西行と交流のあった歌人が、自歌合の編集時点で関わっていると思われることと対応するのではないか。

配列の上で二重の意味を持たせる、あるいは唱和形式となっていることを考えると、配列を意識して作られた歌であり、歌合の中で生じてくる歌という認識もあつたのではないだろうかと考える。そのため、勅撰集や私撰集に採られなかったのではないだろうか。このような立場に立ち、萩谷朴氏がこの歌合独自の歌の多くが、この自歌合のために追加、新作されたと考えることに首肯する^(註18)。しかし、『西行法師家集』との対応がみられず、『山家心中集』『山家集』との対応がみられる歌も存在する。したがって『西行法師家集』以外の家集についても、自歌合を編集する際に考慮に入れていたと受け取ることが出来るのだろうか。

また、『宮河歌合』において定家が十二番の判詞において、

すがたにつきては猶、いはこそ波により、心を思へば、又夜ぶかき関にとまりぬべく侍るを、崇徳院御製の中に、浦わの風に空晴れてと侍るは、ちかき世の事なれど、玉のこゑ久しくとどまりて、今はむかしといふばかりに時代へだたりて侍りにければ、猶右勝とや申すべからん

と「久安百首」の崇徳院の歌語がみられる左歌を負にして、『金葉集』の「あはちしまかよふちどりのなくこえにいくよねさめぬすまのせきもり」(冬・二七一 源兼昌)の歌を参考としている初出歌が勝となっている。初出歌が勝となっている歌は、「御裳濯河歌合」の初出歌十五首中三首、「宮河歌合」では十首中二首である。このことは、初出歌が本歌取りの形式に則っておらず、古歌だけではなく同時歌人の歌と同

じ表現を用いていることも関係していると考えられる。

五

『西行上人家集』をはじめとする西行の私家集のなかで、ある程度まとまった形で配列が試みられ、それに対応する形で自歌合が構成されている部分もみられる。このような中であって初出歌は、伝統に則った歌や同時代歌人に好まれた表現を持つ歌である。このことと、自歌合が法楽の目的であることを考え合せると、西行の考える法楽とは、どのようなものであるのかを知ることになるのではないだろうか。

当時の私撰集である『月詣和歌集』にも「あそびたはぶれのえむなしからずなすべき、(中略)ねがはくは大明神このたびそのことのはをもてあそびたまひてあらはれてあめのしたやすらけくまもりたまへ…」とあり、『玄玉和歌集』序にも「つひに耳をたのしみめをよるこばしむるもてあそびとして、上にも是をすてたまはず、下にもいとふものなかりけり」とあるように、狂言綺語の意識がみられる。このような時代にあつて、西行は法楽として自歌合を伊勢神宮に奉納しているのである。

神代から始まり伊勢の歌で終る「御裳濯河歌合」、一方、「宮河歌合」は、西行の庵を結んだ場所から始まり、来世を思ふ歌で終る。二つの歌合のなかにみられる時間の流れは、一つの物語を作り出している。それは、一つ一つの歌をあたかも連作のように、興や縁によって繋げ

ていく。

そして、西行の名前を伏せて「御裳濯河歌合」は「山家客人」「野徑亭主」に、「宮河歌合」は「玉津島海人」「三輪山老翁」に仮託している。このことも興があることとはいえないだろうか。西行の法楽には、興があることによって、神を喜ばせることを目指したという一面がみられるのではないだろうか。

また、『新古今集』において西行の歌は、連続して取られているものが、慈円とともに他の歌人に比べて圧倒的に多く、その結果収集数が第一位となったとされている^{注19}。実際に、「御裳濯河歌合」十五番右・十六番右がそのまま『新古今集』に入集している。このように連続して西行の歌が取られる傾向にあることは、西行の歌の配列が評価されていたことを示すのではないだろうか。西行の自歌合において、一首一首が秀歌として別々に存在するのではなく、その配列自体も影響を与えることになったのではないだろうか。

注1 山田昭全氏『西行の和歌と仏教』（明治書院、昭和六十二年）山木幸一氏『西行和歌の形成と受容』（明治書院、昭和六十二年）辻勝美氏「西行法師自歌合考―構成の問題を中心に―」（『論集西行』笠間書院、平成二年）

2 谷山茂氏『谷山茂著作集三 千載集とその周辺』（角川書店昭和五十七年）有吉保氏、王朝の歌人8「西行」（集英社、昭和六十年）

- 3 西宮一民氏「伊勢」岩波講座日本文学と仏教8巻『仏と神』（岩波書店、一九九四年）
 - 4 有吉保氏、王朝の歌人8『西行』（集英社、昭和六十年）
 - 5 萩谷朴氏『平安朝歌合大成 増補新訂』四卷（同朋出版、平成八年）
 - 6 久保田淳氏『西行全集』（日本古典文学会、昭和五十一年）
 - 7 注1の山田昭全氏に同じ。
 - 8 注1山木幸一氏に同じ。
 - 9 二十三番右の歌の解釈は井上宗雄氏『中世和歌集』（新編古典文学大系、小学館、平成十二年）による。
 - 10 注9に同じ。
 - 11 『和泉式部集』四三三番～四四四番「こころにもあらずあやしき事いできてれいすむ所もさりてなげくをおやもいみじうなげくと聞きていひやる、かみの文字はよのふることなり」の詞書を持つ。また、西行が和泉式部の影響を受けていることについては、稲田利徳氏によって西行と和泉式部」（『中世文学研究』十二号、昭和六十一年）において論及されている。
 - 12 注1山木幸一氏に同じ。
 - 13 注6に同じ。
 - 14 「西行と連歌」（『中世文学研究』第四号、昭和五十三年）
 - 15 武田元治氏『西行自歌合全釈』（笠間書院、平成十一年）
 - 16 注6に同じ。
 - 17 注6に同じ。
 - 18 注5に同じ。
 - 19 松村雄二氏「西行と定家」『論集西行』（笠間書院、平成二年）
- 〔付記〕 本稿は平成十三年十二月、全国大学国語国文学会冬季大会（万葉文学館）での口頭発表をもとに纏めたものです。発表の際にご教示・ご助言を賜った先生方に厚くお礼を申し上げます。
- （はしもと みか／博士後期課程三年在籍）

